



# 静寂の関宿

せきじゆく

## 亀

山のホテルに戻ると、鈴鹿おろしの洗礼を受けて、同行者はかなりのダメージを受けていた。実際、凍死するかと思っただけだった。東海道の関宿までは歩いて行きたかったが、あきらめた方がいだろう。十年以上前、東海道をぶつ通して歩いた際に、なんの予備知識もなく関宿にたどり着いたときの、あの驚きと感動を追体験したかったのだが、仕方ない。

なんとか、ぎりぎり間に合う電車がある。とりあえず、着込むだけ着込んで亀山駅へと向かい、急いで切符を買おうとしたとき、「やはり歩こう」と同行者が力強く言った。あえて修羅の道を選ぶという。そうして線路沿いの道を歩き始めて、不思議なことに気が付く。もう既に出発しているはずの電車が、私たちの横を走り過ぎていかないのだ。そう、これはこの後に待ち受ける驚愕の事実の伏線だった。切符は買わなくてよかったのだ。なぜなら電車で関まで行くことはできなかったのだから。

そのことに我々はまだ気が付いておらず、線路沿いから旧東海道をひたすら進む。すると雪が結構ふってきた。頭がうつすら白くなるのを、手で払いながら進む。「同行者の上に雪ふりつもる」と、同行者はニヤニヤ笑いながらたびたび口にする。寒さと疲

労で気が狂ったのかと思っただけ、なんだかこちらも楽しくなってきた。二人でケラケラ笑いながら歩く。そうして関宿に到着。町並みのすぐ向こうに鈴鹿山脈が控える、あの関宿の風景だ。関宿は東海道五十三次の宿場で、十年以上前に東海道を歩き続けて昔の面影など無い宿場を見飽きた私が、突然出現した江戸時代の町並みに驚いたのも無理はない。電柱は一本もなく、江戸から明治にかけて建てられた町屋の多くが現存する。昭和五十九年に重要伝統的建造物群保存地区に選定、昭和六十一年には「日本の道一〇〇選」に選ばれたのは当然のことだと思う。

しかし、この度の関宿は誰もいない。もう少しにぎわっているかと思っただけ、先の先まで人がいない。その割に、車が結構通るので、道幅が狭い分神経をつかう。どうやら地元住民の車のようだ。関宿の町並みは江戸時代っぽくしているが、基本は現役の住宅街なのだ。しかも、いまは寒い。だから観光客が少ないのだ。同行者はあつという間に飽きてしまったらしい。まあ、寒さと疲れもあるのだろう。亀山に戻りたいと言いつつ出した。

そうして、JR関宿に到着すると、なんと改札が封鎖されている。そういえば、亀山駅の電光掲示板に「台風二一号の影響で…」と書いてあった(前号

参照)。まさかあれか。関西本線亀山〜柘植間二〇キロは平成三十年一月まで運休らしい。だから亀山駅から西側では電車が動いていなかったのか。じゃあ、関宿が静寂に包まれていたのも、もしかしたらこのせいもあるのか。代用バスが駅前から出たので、無事に亀山まで戻ることができたが、どうも、最近は妙なトラブルに巻き込まれることが多い。まあ、苦難も旅の醍醐味というべきか。

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
江口知秀  
Tomohide Eguchi



関宿の町並み

[交通] JR関駅より徒歩約5分